様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年６月１９日現在

機関番号：３２６１４
研究種目： 若手研究(B)
研究期間：2010～2012
課題番号：２２７２０１８８
研究課題名（和文） 近代日本語「点字資料」を用いた仮名遣い改定史の調査研究

研究課題名（英文） The Usage of Tenji-Kana (Japanese Braille) in Early Modern Japanese

研究代表者
中野 真樹（NAKANO MAKI）
國學院大學・文学部・講師
研究者番号：30569778

研究成果の概要（和文）：点字かなづかいの研究のため、近代日本語点字資料をもちいてかなづかいの調査をおこなったところ、現行の点字かなづかいは近代点字かなづかいの骨子をうけついでおり、また明治・大正期のかなづかい改定論の影響をうけていることをうかがうことができた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is a research on the usage of Tenji-Kana (Japanese Braille) in early modern Japanese. The movements of reform of the Usage of Kana (かなづかい改定論) during the Meiji and the Taisyô period is effected on The usage of Tenji-Kana in Modern Japanese.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
２０１０年度	1,500,000	450,000	1,950,000
２０１１年度	700,000	210,000	910,000
２０１２年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総 計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・日本語学
キーワード：日本語学・文字・表記・かなづかい・点字

１．研究開始当初の背景

日本語点字のかなづかいは、「現代仮名遣い」とはことなる独自のものとなっている。

まず、現在おこなわれている点字の表記法について述べる。点字の表記法の基準となるものは、日本点字委員会によって定められている。そこで、『日本点字表記法 2001 年版』（日本点字委員会編刊）から、現在の点字表記についてまとめる。

日本語点字は点字１字が墨字のかな１字に対応する。ただし、晴眼者用の墨字とまったく同じというわけではなく、濁音・半濁音、促音、拗音の書き方に独特のルールがある。濁音は、かなの直前に濁音符を付し、「濁音符＋か」で墨字の「が」をあらわす。また拗音はかなの直前に拗音符を付す。そしてたとえばカ行では「拗音符＋か」「拗音符＋く」「拗音符＋こ」というように書き表す。長音符は「ー」であり、これは墨字と同様に使われる。促音は促音となる直前のかなの後に促音符「っ」を置き、「かっ」とあらわす。

また、表記法についても現行の墨字で行われているものとは異なる。

点字が墨字と異なる点は以下の通りである。

(1)漢字を使用しない
　広く行われている６点点字では、漢字を使用しない。ただし、点字による漢字表記は川上秦一の「８点漢字」や、長谷川貞夫の「６点漢字」などが提案されている。
(2)かなづかいの違い
　①助詞の「は」「へ」「を」について
墨字では「は」「へ」と書く助詞について、墨字では「わ「え」に相当する点字「わ」「え」を使用する。ただし、助詞「を」に関しては、点字でも「を」に相当する「を」となる。
　②長音表記について
　点字の表記の特徴的なものとして、ウ・エ・オ段長音表記がある。墨字のかなづかいでは、ウ段長音は、「ウ列＋ウ」拗長音は「ウ列＋ゅう」、オ段長音は、「おうじ（王子）」「おおかみ（狼）」のように和語には歴史的仮名づかいの名残で、「おう」「おお」の２通りの書き方がある。漢語の長音・拗長音は「オ列＋う」「イ列＋ゅう」となっている。これは、点字ではウ段長音は「くーき（空気）」となり、オ段長音には歴史的かなづかいのなごりが見られ、「おおかみ（おおかみ・狼）」のように「おほ」となるものは「オオ」とする。それ以外のオ段長音はおーじ（王子）」のように「オ列＋ー」となる。拗長音は、「拗音符＋くー（きゅー）」「拗音符＋こー（きょー）」のように、「拗音符＋ウ列＋ー」「拗音符＋オ列＋ー」となる。
　エ段長音は、和語では「ねえさん（ねえさん）」のように「エ列＋え」、漢音では「えいせい（衛生）」と「エ列＋い」となり、長音符が使われないのが原則である。

(3)わかちがきをする。
　石川倉次考案の６点点字は漢字を使用しない。漢字の機能として、語の切れめを示すというものがある。
　漢字を使用しない点字は、わかちがきをする。わかちがきは大きくわけて、「単語わかちがき」と「文節わかちがき」がある。単語わかちがきは単語ごとにわかちがきをする。国定教科書などはこの単語わかちがきがみえる。また、ローマ字日本語文も単語わかちがきをしているものが多い。
　点字は、文節わかちがきを採用している。ただし、区切りの基準は慣用や書き手の感覚にまかされることもあるようであり、かならずしも統一されているわけではないようである。たとえば「赤い羽根募金」の「赤い羽根」を「あかい　はね」とするものと、１語として「あかいはね」とする２通りがおこなわれている 。

　このように、広く普及している６点日本語点字表記はかな専用文であり、またそのかなづかいも長音表記に長音符「ー」を用いるという特徴がある。
　これは日本語点字を考案した石川倉次らがかなもじ論者であったことの影響が指摘されていた。しかし、実際の日本語点字資料をもちいてのかなづかいの研究はなされていないため、完全にに明らかとはなっていなかった。
　日本語点字は視読文字である日本語墨字と同様に、日本語を書きあらわすための文字・表記システムであり、その成立は明治期である。それ以来、日本語点字によって書かれた点字資料は多く蓄積されてきた。このような歴史をもつ日本語点字資料は、日本語墨字資料とならんで重要な日本語文字・表記研究の対象となる。

２．研究の目的

　日本語点字は墨字とならんで日本語文字・表記システムであり、明治期に考案されて以来改良をくわえながら現在もつかわれつづけているという歴史がある。そして点字でかかれた文書も、おおく保存されている。このように、独自の文字・表記文化 をもつ日本語点字について、墨字とならんで文字・表記の研究をする必要がある。
　本研究では、日本語点字のかなづかいに着目し、現存する近代日本語点字資料の調査をおこない、現行の点字かなづかいと近代点字かなづかいの比較をおこなう。そして日本語点字の成立と展開の過程から、現行の点字かなづかいとの関係について考察していくことを目的として従来より指摘されていた近代かなづかい改定論と日本語点字かなづかいの関連性の解明のため、近代点字資料の研究をおこなう。

３．研究の方法

　筑波大学附属視覚特別支援学校資料室所蔵の近代点字資料のうち、国語教科書および点字新聞『大阪点字毎日』を資料として選定し、写真撮影・データ化をおこなったうえで、助詞「は」「へ」「を」、よつがなおよび長音表記のかなづかいの調査・分析をおこなった。
　点字かなづかいの変化はおおきく４期にわけられるという。第１期は日本点字が成立した明治 23(1890)年頃から約 10 年間である。このころは歴史的かなづかいがもちいられていた。第２期は字音語を表音的かなづかい、和語は歴史的かなづかいで表記されていた。これは小学校教育で明治 33(1900)年から８年間行われた明治 33 年式棒引きかなづかいの特徴と共通する。その後、墨字による小学校教育は歴史的かなづかいにもどるが、点字は独自の表音的な表記法へと変化していく。こ

こには、大正 12(1922)年に創刊された新聞「点字大阪毎日」が大きな影響をあたえているといわれている。これが第 3 期であり、約 30 年間続く。第 4 期は、点字表記の全国的な統一と体系化が目指された時期をさす。昭和 30(1955)年に日本点字研究会が発足し、昭和 41(1966)年に日本点字委員会へと発展した。日本点字委員会は『日本点字表記法(現代語編)』(昭和 46(1971)年)・『改訂日本点字表記法』(昭和 55(1980)年)・『日本点字表記法 1990 年版』・『日本点字表記法　2001 年版』といった表記法書を編集・発行している。
このように、点字は墨字とくらべてはやい時期から継続して歴史的かなづかいではなく、より表音的なかなづかいが採用されていたことがしられている。また、点字のかなづかいは時代によって変化していることも確認されている。
　そこで、今回調査した資料がこの点字かなづかい史区分のうち第何期にあたるものであるのかを調査し、それぞれの表記の特徴についてまとめた。
　あわせて、点字かなづかいとの関連が指摘されている石川倉次のかなづかい、「明治 33 年式棒引きかなづかい」の調査をおこない、点字資料との比較をおこなった。

４．研究成果

　今回は近代点字資料『点字　尋常小学読本』および『点字大阪毎日』1 号から 20 号までの調査が終了した。以下に、各資料のかなづかいの特徴をまとめる。

（1）近代点字国語教科書『点字　尋常小学国語読本』のかなづかい

　『点字　尋常小学国語読本』は、いわゆる第 3 期国定国語教科書『尋常小学国語読本』を点字訳したものである。
　本資料は全 12 巻で、そのうち第 1 巻が未発見であるため、第 2 巻から第 12 巻までの 11 冊が確認できた。この 11 冊はすべて、墨字版と巻次・構成がそろえられている。また、今回調査をおこなった点字資料は特に改編がくわえられることはなく、墨字版をそのまま翻字したものとなっている。ただし、墨字版にある挿絵・注は本資料では省略されていた。

①助詞の表記は「わ」「え」「を」を用いる。
②よつがなの表記は字音かなづかいを含む歴史的かなづかいと同様である。
③長音表記には和語も字音語も長音符を使用する。ただし、活用語の活用語尾や字音語のエ列長音など長音符をもちいない語も一部ある。

　本資料のかなづかいは、和語と字音語ともに、長音表記に長音符を使用することから、点字かなづかい史の区分では第 3 期にあたる点字の表記であることが推察される。よつがなの表記などにおいては、現行の点字かなづかいとは異なり、歴史的かなづかいの特徴を持ち合わせている。このように点字のかなづかいは時代によって変化が見られることが実際の資料からも確認できた。

(2)近代点字新聞『点字大阪毎日』のかなづかい

　『点字大阪毎日』は大正 11（1922）年 5 月に創刊された点字新聞であり、現在も『点字毎日』が刊行されている。日本語点字使用者の情報の発信・受信の手段としておおきな役割を負っていたメディアであり、日本語点字文化を知る上での重要な資料として研究する価値がある。
　日本語表記史の上からも、大正期にすでに歴史的かなづかいより表音的なかなづかいを用いていたことが知られており、かなづかい改定論史研究の資料となる。
　本研究では、『点字大阪毎日』第 1 号から第 20 号までを写真撮影し、点字から墨字への翻字をおこなった。
　それをもとにかなづかいの調査をおこなったところ、以下の結果がでた。

①助詞の表記は「わ」「え」「を」を用いる。
②よつがなの表記は字音かなづかいを含む歴史的かなづかいと同様である。
③長音表記には和語も字音語も長音符を使用する。ただし、活用語の活用語尾や字音語のエ列長音など長音符をもちいない語も一部ある。

　この結果は、近代点字国語教科書『点字尋常小学読本』と同様にみえる。しかし、長音表記に細部で差異がみられる。オ列の和語のうち、「おおかみ」「こおり」など、「現代仮名遣い」では「オ列＋お」のかなづかいとなるものが、『点字尋常小学読本』では長音符を用いて表記されていたのにたいして、『点字大阪毎日』は「現代仮名遣い」と同様に「オ列＋お」の表記となっていた。
　『点字尋常小学読本』と『点字大阪毎日』はともに、点字表記史区分でいくと第 3 期にあたるかなづかいである。
　しかしながら両資料のかなづかいは完全に一致するわけではなく、第 3 期にあたる資料のなかでもかなづかいの方針に違いが発生していたことが分かった。
　また両資料を現行の点字かなづかいと比較すると近代点字かなづかいは一致してお

らず、また同じ第3期の資料とはいうものの、資料によって長音オ列の表記に差異があることがわかった。さらに多様な点字資料のかなづかいの調査の必要がある。

また、石川倉次のかなづかいおよび「明治33年式棒引きかなづかい」と近代点字資料のかなづかいを比較した結果では、助詞の表記および長音表記にそれぞれ現行の点字かなづかいとの共通点はあるものの、それらと完全に一致するわけではない。長音表記にかんしては、近代点字かなづかいは「明治 33 年式棒引き仮名遣い」と共通する点が多く、現行の点字かなづかいは近代点字仮名遣いよりは墨字の「現代仮名遣い」との共通点の方が多くなっていることがわかった。

現行の日本語点字のかなづかいは墨字の「よりどころ」である「現代仮名遣い」とはことなっており、以前から指摘のあった日本語点字考案者石川倉次のかなづかいや、明治 33 年式棒引きかなづかいとの共通点も確認できる。しかしながらそれらと完全に一致するものではない。さらに、今回調査をおこなった『点字　尋常小学国語読本』のなかにあらわれるかなづかいは、現行の点字かなづかいとも一致しない。現行の点字かなづかいは、長音表記に着目するならば本資料のかなづかいよりも「現代仮名遣い」と共通する点がおおい。

日本語点字は日本語墨字とはべつの独立した歴史・文化をもつ文字・表記システムではあるが、墨字のかなづかいとまったく無関係に展開してきたわけではなく、各時代の墨字のかなづかいとの関連についても着目する必要がある 。また、今回調査した本資料は日本語点字表記史の区分でいう第3期にあたる表記であったが、第3期に相当する期間にも、昭和期の初頭にエ列・オ列長音の表記や活用する語の活用語尾の長音表記などに関係者間での議論や実験があったことは、すでに指摘されている。実際にいつ、どのような形で変化していったのかという日本語点字の表記史をさらにあきらかにしていくためには、各時代・各分野の点字資料の調査が必要であろう。

さらに、日本語点字は明治期からの歴史をもち、かな専用文であり文節わかちがきをするという表記上の特徴をもつ。かなづかい以外の観点からも、日本語文字・表記研究の一環として、日本語点字資料についての研究が必要であろう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
①中野真樹、2013、「『尋常小学読本』の仮名遣い」、『言語文化研究』12、pp. 11-17、査読無
②中野真樹、2011、「現代仮名遣い」は改定するべきだ」、『社会言語学』11 、pp. 283-287、査読有
③中野真樹、2011、「石川倉次著『はなしことば　の　きそく』のかなづかいについて」、『言語文化研究』10 、pp. 1-13、査読無

〔学会発表〕（計１件）
中野真樹、「近代仮名遣い改訂史からみた「点字仮名遣い」について」、日本語学 2011 年度春季大会、2011 年 5 月 29 日、神戸大学

６．研究組織
(1)研究代表者
中野　真樹（NAKANO　MAKI）
國學院大學・文学部・講師
研究者番号：30569778

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：